盧以緯『助語辭』と毛利貞斎の著作

國金海二

これは中国においてはじめて著わされた古漢語（いわゆる漢文）の助辭（字）に関する専門書と、それがわが国に渡来してどのように研究されたかについて述べるものである。

唐の柳宗元（七七三―八一九）の「復杜温夫書」に「但見生用助字、不当律令。……所謂乎歟邪哉夫者疑辭也。矣耳焉也者決辭也。今生則一之。」（あなたの助字の用い方は文法にかなっていません。……いわゆる乎歟邪哉夫は疑辭です。矣耳焉也は決辭です。いまあなたはこれを混ぜています。）とあり、また明代に「之乎者也已焉哉、用得来的好秀才」（之乎者也已焉哉などの助辭を用いられるすばらしい学生）という諺があったというが、これらのことから中国においても昔から助辭の用い方がいかにむずかしかったかということがわかる。

この助辭に関する専門書をはじめて著述したのが盧以緯であり、その書名は『助語辭』と言われた。

それがわが国に渡来して、その解説と研究とをはじめて行ったのが毛利貞斎であり、それらを書きとどめたものを『鼇頭助語辭』と『訓蒙助語辭諺解大成』と言った。

助辭とは

中国の古漢語において語の分類は南宋時代の詩論の隆盛とともに重視されてきたようである。

これは詩の構成、とくに対句の技法の面から語の区分が必要となったからであり、「実字」「虚字」という用語が用いられるようになった。この「実字」とは、現代中国語法でいう「名詞」と「数詞」がこれにあたり、「虚字」とはそれ以外のすべての語を言ったようである。また、時には「虚字」を「虚活字」と「虚死字」とに分ける場合もあり、前者は「動詞」を指し、後者は虚字中のそれ以外のものを指している。

これらの語の分類は詩論の中のことであるが、これ以後清朝末期に西欧的な体系的語法研究が始まるまでの中国における語の分類一般と考えられる。(注1)

この中で最も理解しづらいものが虚死字であり、(注2) 特にこれに含まれる助辭と呼ばれている「之」「乎」「者」などの類であった。

この助辞とは、日本語の助詞・助動詞のような働きをするものであり、あくまで本体に対する「助」的なもの、実に対する「虚」的なものであり、その理解の困難さの原因について、牛島徳次先生は「この『虚』的・『助』的な語の最も大きな特徴の一つは、この語が用いられなくなると、その後の人々には全くといってもいい程その意味内容が分らなくなってしまうことにある。」と述べている。(注3)

しかし分からないものを分からないままにすませることはできずに、その研究にはじめて着手したのが盧以緯であり、小冊子であるとはいえ最初の専門書を書き著わしたのである。

(注1) 青木正児氏は『中国文学報』(第四冊)で「実字は名詞を主として形容詞中の数詞のみが之に加はり、虚活字は動詞、虚死字は副詞・形容詞・前置詞・同動詞其他の助辞を含むのである。是は詩語に就いて論ぜられてゐるけれども、推広めて一般の文法に及ぼすとしても、品詞の分類は此の三分法を以て尽すことが出来よう。」と述べている。

(注2) 『対牀夜語』(宋、范晞文)にも「虚活字は極めて下し難し、虚死字は尤も易からず。蓋し是れ死字と雖も、之をして活かしめんと欲す、此れ難しと為す所以なり。」とある。

(注3) 『助字考』東京教育大学文学部国文学漢文学論叢。また牛島先生はこれに続けて次のようにも述べている。「何が分らないのか、なぜ分らないのか、ということを考えてみると、最も簡単に考えられるのは、ことばのはしはしにつけ加えられるつけたしのことば(中にはことばとも言えぬ息づかい程度のものもあるかもしれない)である。これらは生きているものであり、感情の所産、生理の所産であるから、一たびこれが用いられなくなった暁は、何人も再現し得ず、更には理解し得ない(もしくは理解の甚だ困難な)ことになるのであろう。」

訓読と助辞

ではわが国ではどうであったろうか。

漢文を直接理解するのではなく、訓読という方法を経て理解するわが国民には中国人にもまして助辞を理解することは困難だったにちがいない。

まず漢文の訓読についてみてみたい。

わが国に漢文がいつ渡来したかは明かではないが、『古事記』応神天皇の条に「百済の和邇吉師が論語十巻と千字文一巻を朝廷に献上した。」とあり、また『日本書紀』応神十六年の条に「王仁が百済より来て、太子の菟道稚郎子がこれを師として諸典籍を習った。」とある。これら諸典籍が具体的にはどのように読まれたかもさだかではない。しかしこれらの典籍は当時の人々にとっては外国語文であったはずであり、その最初は、われわれが外国語を学ぶように音読し、翻訳という形で取意したのではないかと推測される。

そして遅くとも平安朝初期までには、現在訓点資料にみられるように、日本語とは言語の系統も性質もまったく異なる漢文を、その表記のままで日本語に合わせながら訳読するという方法——訓読を工夫したのである。

漢文を、その原形のままで日本語文として訓読することは、(イ)述語や目的語(補語)などの位置が異なること、(ロ)日本語の助詞・助動詞や敬語などは漢文では漢字で表記しないこと、(ハ)漢文にある「之」「乎」「也」などの助辞がうまく日本語にあてはめられないこと等、いくつかの困難があったが、以下のような方法でそれらを克服して訓読という方法を成立したのである。

(イ)は、返り点を付す。(ロ)は、日本語の助詞・助動詞・敬語などを読み添える。(ハ)は、文脈に応じて自由に読んだり、読まなかったりした。(注4)

このようにして生まれた訓読法によって読まれた訓読文そのものは、その時々の日本語の文とあまり違わなかったものであり、時代が降り、種々の事情(注5)で訓読が固定していったとはいえ今日から比べれば、わりあい自由に読まれていたのである。助辞も前述のようにいろいろに読んだり不読ですませたりしていたが、日本語にあてはめて考えられないものがあるなど、理解するのに一番困難であったようだ。

鎌倉期まで続いたこのような訓読法に大きな変化——特に助辞の訓法について——がおこった。それは朱子新註を信奉する学者などによって主張された新しい訓法である（朱子学摂取による読み方の違いは考えない）。

まず不二庵岐陽方秀（一三六一—一四二四）は、「文字読ミヲハ無レ落字様ニ、唐音ニ読ミ度也。其ノ故ハ、偶一句半句ソラニ覚ユル時、ヲキ字、不レ知レ有二其ノ何ノ字一、口惜哉。」と主張し、漢文は音読すべきものであるとし、訓読するならば落字なきように（すべての字を読むように）すべきであるとしている。(注6)

また岐陽の弟子一条兼良（一四〇二—一四八一）は『大学童子訓』において助辞「而」字なども読まねばならぬとし、それに続けて次のように述べている。「本註ニ、而ノ字ナトノヤスメ詞ヲ、訓ニハ読マス。新註ニ点ヲ加ハ、語助ノ字ニテモ、ヨマルヽ程ノ辞ヲハ、悉ク読ベキナリ。其故ハ、本経ヲハ、必ソラニ誦スヘキモノ也。其字ヲ落シテ誦ヅレハ、ヤスメ字ノ在所ヲハ、ソラニヲボヘヌ、別ニ又文章ヲナス為ニモ益ナキ也。……故ニ新註ヲ学ハン者ハ、一字ノヤスメ詞ヲモ残サス誦スヘキ也。」と。

そして岐陽・兼良などの説を整理して著述し、後世の訓読法に最も大きな影響を与えたものに桂庵玄樹（一四二七—一五〇八）の『桂庵和尚家法倭点』がある。それは、漢学について種々の解説を載せており、助辞についての項をみると、その主なものについてのよみ方を説き、「則」字の項では「古点ニ、上ノ字ノ下ニテ、トキンハト点スル時ハ、スナハチトヨム事マレナリ。故ニ新註ニ、朱ニテ、則毎レ字如レ此点スルナリ。是為レ可レ正二古点読落一也。」と述べ、助辞を読み落さないようにすべきであることを主張している。

この主張は、新しく伝来した朱子新註を学ぼうとする者にとっては、すべてを見直してみるという当然な姿勢であるとともに、文字面を見なくても訓読文によって原漢文を想起でき、漢作文力を増進することになった。しかしすべての字を読むことによって、平安朝から続いた博士家流の訓読法の特徴であった自由な翻訳調に近いものとは異なり、直訳調な生硬さが急に増えてきた。(注7)

江戸時代になり、朱子学が官学となるにおよんで、桂庵和尚などの助辞に関する考え方がますます注目されるのは当然な成り行きであり、それに対する一般の関心も深くなってきた時、中国からその専書『助語辞』が渡来してきたのである。

(注4) たとえば清原宣賢（一四七五—一五五〇）点の『論語集解』の巻首に「置字大略不レ読レ之、当レ読之置字点レ之」とある。不読文字を「置字」または「ヤスメ字」と言った。

(注5) 官職の世襲による加点本の父子伝授が行われたこと、遣唐使が廃止され日中交流途絶による学問的水準の低下などが考えられよう。

（注6）『桂庵和尚家法倹点』に「不二和尚曰」としてその説が記されている。

（注7）この訓読法による生硬さについては当時より疑問がもたれ、兼良に学んだ桃源瑞仙（一四三〇―一四八九）もその著『史記抄』で「日本ノ当世様ニ之字ヲツヨク読タカリテ、之之ナント読マテハ恥辱ノヤウニ心得タソ。昔ハサウモナケレハコソ、総テニ点シタハナイソ。語ノ助辞チヤホトニ可レ読理テハナイソ。」と述べている。

『語助』の発見

この『助語辞』は江戸初期に渡ってきたものと思われるがはっきりした年代はわからない。

中国ではあまりかえりみられず、ほとんど見ることができないので、寛永十八年（一六四一）刊の和刻本『新刻助語辞』（序には『助語辞』とある）を、そのままの複刻本であるとして書誌的なことをみると次のごとくである。

『新刻助語辞』一巻。東嘉（現、浙江）の人、盧以緯（允武）の著。明の銭唐の人、胡文煥（徳甫）の校。「万暦壬辰（一五九二）季秋吉旦、銭唐胡文煥、識於文会堂」とある胡氏の序文によれば、胡氏が偶然に入手した盧以緯の『助語』一帙を編校して刊行したものである。はじめは単刊本であったか、胡氏による『格致叢書』中の一冊であったかは不明であるが、日本には『格致叢書』の一冊として舶来(注8)し、寛永十八年に単刊本として世に出たのをはじめ寛永十九年（一六四二）刊、延宝二年（一六七四）刊などがあり、明治期になっても十四年（一八八一）に中村敬宇の序をそえた『助語辞解』が刊行されている。

著者の盧以緯については、東嘉の人という以外は全く知られておらず、『助語辞』の成立年代も不明であり、編校した胡文煥が明代の人であることにより、盧以緯も明代の人と考えられていた。

ところが一九六二年、陳望道氏が北京図書館の『奚囊叢書』中から盧以緯の『語助』を発見(注9)し、それには泰定元年（一三二四、元の晋宗の時代）の胡長孺の序があることがわかった。そして一九七九年版の『辞海』の「語助」の項には「書名。作者盧以緯、字允武、元永嘉（今属浙江）人。搜集語助辞百余、闡釈其意義、分析其用法、為中国研究虚字用法最早的専書。今伝明嘉靖年間刊行的《奚囊広要》叢書本和万暦年間胡文煥編輯的《格致叢書》本。奚囊本有泰定元年（一三二四年）胡長孺序、格致本更名《新刻助語辞》、刪去胡序、内容亦略有刪節。」とあり、この項を執筆した胡裕樹氏は、第一、奚囊本が原本であり、格致本やその他の版本はその改編本であること、第二、この書の原名は『語助』であり、『助語辞』は後に改めたものであること、第三、『語助』の成立は一三二四年よりも前であり、このことにより中国における虚字用法についての専書成立の時期は大いに早められたと述べている。(注10)

このような著作であるが万暦年間以後は現在に至るまで広く世に流布することなく見る人も無かったようである。しかし胡裕樹氏の言うごとく虚字（助辞）研究の嚆矢として見直されるべき書物であることにより、最近、劉長桂・鄭濤両氏はその点校を行い一九八四年に『助語辞』を出版したが、その底本となったのが後述する毛利貞斎が注を施した天和三年刊の『鼇頭助語辞』である。

（注8）平野彦次郎氏『徳川時代に於ける助字・虚字・実字の著書に就て（上）』（『斯文』九―九）および戸川芳郎氏『漢語文典叢書』（第六巻）

による。

（注9・10）ともに劉長桂・鄭濤点校『助語辞』の胡裕樹氏の序による。なお、『奚囊叢書』本に序文を識した胡長孺は『元史』巻一百九十にその伝がある。また序文と削除された部分は、劉・鄭点校『助語辞』に見られる。

『助語辞』について

ではこれはどんな書物なのだろうか。やはり和刻本『新刻助語辞』によって述べてみよう（訓点は主にそれによる）。

それは、われわれがいわゆる「助辞」と考えている「也・矣・焉……且・思・斯」など一一六語について、メモ程度に簡略に書かれたものである。例えば「則」の説明は「此是因レ有二上意一発二下語一」という九字である。しかしこのような簡略なものばかりではなく「乎・歟・邪」の項をみると次のようである。

乎字多疑而未レ定之辞、或為二間語一、只是俗語麽乎字之意、歟字邪字為二句絶之余声一、亦類二乎字之意一、此三字有下如二対レ人説語而質レ之者上、邪字間有下帯二疑怪一之意上、句中央着二乎字一、如下浴二乎沂一之類上、此乎字与二於字夫字一相近、却有二詠意一、攻二乎異端一、意微激作、非レ若二於字之詳安一也

この例文から本書の内容をみると、まず次の三点が明かになる。

㈠、「乎」を当時の俗語「麽」にあてはめて、その意義を解きあかそうとする。

㈡、「疑而未定之辞」とあるように、助辞の類別をこころみている。この類別は朱熹のそれに従ったものが多く、その用語も「疑辞」「発語之辞」「歎辞」「禁止之辞」「反語之辞」「語助之辞」「語辞」「語助」「歎声」など朱註にみられるものが多い。

㈢、「浴乎沂」は『論語』先進篇、「攻乎異端」は同じく為政篇の文であり、用いた例文は『論語』『孟子』など四書と『詩経』『書経』など五経からのものがほとんどを占めており、その解説も朱熹の『四書集註』『詩経集伝』などを基にしている。㈡の「疑而未定之辞」も『論語』雍也篇の朱註「乎者疑而未定之辞」によっている。

次に「庸・顧・殆」の項をみると、「然非二語助一而有下似二語助一者上」（前後略す）と述べ、朱熹の説を引いて「殆」を「危」の意ではなく「発語辞」に用いることもあることを言い、また自らは「西曹地忍レ之」は「但忍レ之」と言うのと同じような意味であるとし、「地」を「但」の意にする場合（注11）――実字などの助辞への転成（注12）――もあることをはっきり記している。

以上のように本書は朱熹の助辞に関する考え方を盧以緯が祖述したのみの感もあるが（注13）、中国における助辞研究の最初の専書として記憶されるべきものである。

（注11）これは毛利貞斎によれば『漢書』の顔師古の注によっている。

（注12）この考え方は、わが国の助辞に対する考え方をも決定したものであり、伊藤東涯（一六七〇―一七三六）の『操觚字訣』の「語辞」の項には「此篇ニハ、文章ノ語辞、及ビ虚字ノ語辞ニ近キモノ、或ハ虚字ノ和訓ニテ、語辞トナシテ読ムモノノ大概ヲノス。」と述べられており、荻生徂徠（一六六六―一七二八）の『訓訳示蒙』の「助語」の項にも「総シテ助語ハ製字ノ始ヨリ助語ニ作リタル字ハ少シ、皆多クハ仮借シテ助語ニ用タルモノナリ、皆ソレソレノ本字ノ意ヲ軽ク使ヒタルモノナリ。」と記されている。

（注13）盧以緯が朱子学を信奉していたことは、『語助』の序文を識した胡長孺が朱熹の流れをくむ学者を師としていたことが前述の『元史』列伝中にあることも傍証になろう。

『鼇頭助語辞』について

前述のように、この『助語辞』が江戸時代初期のいつ日本に渡来してきたか、また『格致叢書』より誰が単刊本とし、加点したかは明かではないが、朱子学が隆盛になるにつれて朱註が多く引用されているこの書が人々の注目をひくのは当然のことであったろう。

そしてこれにいち早く注釈を施したのが毛利貞斎であり、その書を『鼇頭助語辞』と言い、天和三年（一六八三）に刊行された。

毛利貞斎は、大阪の人、名は瑚珀、字は虚白、通称は香之進、貞斎はその号。京都で講説し著書も多いが生没年は不詳。元禄（一六八八―一七〇四）ごろの人であることは間違いない。

この『鼇頭助語辞』は、『助語辞』の序文をはじめすべてを複刻し、その書名の通り頭部と左右を広くとって、そこに序文・本文の一語ずつの注釈を記したものである。これには注釈者の氏名は無いが、後に述べる『訓蒙助語辞諺解大成』の「要之・要知」の項に「予ガ先年所レ著鼇頭漫滅ニ及ベルガ故ニ……」とあり、また「然則・然而・不然」の項には「予ガ鼇頭ニ記シタル故ニ今略レ之」などとあることからも貞斎自身の注釈であることは間違いない。

その注釈の内容は、原書が簡略にすぎるために、韻書・字書を引いて盧以緯の記述を補っているとともに、原書が引用した句の出典を詳細に調べあげている。

例えば前に記した「乎・歟・邪」の「乎」についてみると「乎、韻会虞韻云、説文乎語之余也、……広韻極辞也、一曰疑辞也」とあり、また「邪」の項にある例文「攻乎異端」については「論語為政篇云、子曰攻乎異端斯害也已」と記している。

注釈に用いた書は朱熹の『集註』本が最も多いのは原書の性格上もっともなことであるが、その他の目立つことは韻書類が多く用いられているが字書類は『爾雅』・『字彙』ともに数か所にしか用いられていないことである（『説文』は韻書類に引用されているものが多く記されている）。

なお、用いられている韻書は『広韻』『集韻』『増韻』『韻会』『小補韻会』（『韻会小補』か）『洪武正韻』『五車韻瑞』などであり、当時の学者の使用した韻書の一端を知ることができる。

この『鼇頭助語辞』には貞斎自身の助辞に関する考え方は一つも述べられていないが、助辞研究の重要さを認識しわが国においてその端緒を開いたものとして評価されるべきである。

『訓蒙助語辞諺解大成』とその影響

それから約二十五年後、宝永五年（一七〇八）に『訓蒙助語辞諺解大成』が同じく毛利貞斎によって著述された。これも本文中に「盧氏ノ解語短フシテ、初学ニ無シ補」と述べているように、やはり原書が簡略にすぎるためにその注釈を施したものである。『鼇頭助語辞』が主として朱註と韻書とを引挙して語釈したのとは異なって、「諺解」つまり俗語によって解釈したものである（「俚諺抄」「国字解」と言うのと同じである）。

その内容を検討してみると、次のようなことがわかる。

㈠、語釈には主に朱註と韻書などを用いているが、それに加えて字

書類を多く引いている。これは俚俗の語による注釈のためには是非多くの参考文献が必要であったのであろう。

用いられている字書は『爾雅』『釈名』『揚子方言』『説文』『説文繫伝』『佩觿集』『埤雅』『海篇』『字彙』などであり、その他『揚子法言』『顔氏家訓』『容斎随筆』『童蒙訓』『文章一貫』『操觚字要』などを引用している。

また邦人の著作としては『語録解義』があり、中国の俗語への関心もうかがえる。

(二)、原文解説のために多くの例文を挙げてその説を補完しようとしている。

例えば「也・矣・焉」の項をみると原文では「是句意結絶処、也意平、矣意直、焉意揚、発声不レ同、意亦自別」とあり、「也」については「意平」と記すのみである。

しかし本書では「也」について韻書・字書による解釈の外に「也意平トハ、所ニ説述ノ語事理ヲ舒布コト推乱離ト言記タル時ニハ、必ス用ル故ヘニ、句意無ニ残滞一シテ、平々タルトナリ、例ヲ挙ケテ示サバ、論語学而篇ニ、有子曰信近ニ於義、言可レ復也……ノ類ヲ見テ可ニ味察ニ」と『論語』の文を六例挙げて解説をおこなっている。

(三)、原文の解説不足を補うとともに自身の考え方を述べている。

「嗚呼・吁」の項を例にとると、そこでは「嗚呼、嗟歎之辞、其意重而切、吁亦咨嗟之辞、其意稍軽」とあるが、「吁」について「吁ハ物ニ驚ロキタル時発スル声ナリ。其驚ニハ悲シフコトモアリ、又喜ブコトモアリテ、一ニハ不レ定。又疑怪シテ驚クコトアリ」と単に「咨嗟之辞」のみでないことを『書経』(堯典)の「吁、嚚訟、可乎。」と同じく皐陶謨の「禹曰、吁、咸若レ時、惟帝其難レ之。」を述べている。前者を「驚キ怪フノ声」とし、後者を「意ニ不レ肯辞ヲ聞テ、此ノ声ヲ発スル」としている。

以上三点が本書の主な特徴であり、『鼇頭助語辞』には一つもみられなかった原書に対する批判的な見方や貞斎自身の助辞に関する考え方がいたる所に述べられており、単なる『助語辞』の国字解ではなく、邦人の助辞に関するはじめての解説書として評価されるべきものである。

次に本書が後世に及ぼした影響について述べたい。それはこれが俚語(口語)で書かれたことと、わが国の助詞・助動詞との関連においてとらえられていることである。

まず貞斎自身が「也・矣・焉」の項で「俚語ヲ下ス」と記しているように、原書にならってわが国ではじめて俚語によって字義を解釈していることである。二例を挙げる。「所以」については「ユエント読ム時、俗語ノイワレト云フニ同ジ」と述べ、「然」については「信ズル辞ニ用ル時ハ、シカリト訓ジテ、俗語ノ成程其ノ通リト云ヒテ、我ヨリ他人ヲ慫ニ肯与シタル辞ニ同ジ」と解釈している。

このように俚語を用いて解釈しなければならなくなったのは、前に記したような漢文を文全体で理解しその中でおのおのの語を、それにあたる当時の口語に近いよみ方をした方法が姿をけし、ある固定してしまったよみ方だけが訓読文中に残っているので、一般庶民にはそれを取意することができなくなったためであろう。

これ以後、すべての助辞に関する専書はこの体裁をとり、また東涯に『操觚字訣』、徂徠に『訳文筌蹄』などという俚語によって字

義を解釈した字書類が出現するようになったのである。

次に、貞斎は助辞（助語）を序文の解説において「助語トハ、文章連綿スル語句ノ間ニ、彼ノ之乎者也矣焉哉等ノ字ヲ、挾雑ヘテ所ニ著述ニ人ノ志意不ニ混乱一、此レヲ取リテ観覧スル者モ能ク悟入サセンガ為メニ加ルヲ云」と定義し、またそれを和歌に関連づけて「例セバ我カ国ノ倭歌ニ、コソ・ケリ・ナリ・カルラン・カリケリナドノ出于葉ト同ジク、僅カノ文字ヲ句中ニ挾入レテ、疑ヒノ意、決定ノ語、悲歎ノ深キ、歓楽ノ盛ンナルマデ、明白ナラシムルノ具ヘトスルヲ助語ト云」と述べ、それがわが国の助詞・助動詞などにあたるものであると理解している。(注14)これらの理解は東涯の「文有ニ虚実一、而実為レ主、虚為レ賓。天地日月山川草木、字之実者也。覆載照臨流峙生栄、字之虚者也。所下以道ニ賓主之際一通中虚実之用上者、其助辞乎。」（『助字考』序）という考え方、(注15)徂徠が少し疑問をもちながらも「也矣焉兮」の項で「倭歌ノテニヲハニ直シテ云ハヾ、也ハナリ、矣ハケル、焉ハケレ、的当トハ云カタケレドモカクモアランカ。」（『訓訳示蒙』巻三）と述べているのと似かよっており、(注16)現在でもほぼ首肯しうる考え方とも言える。

以上本書が及ぼした影響を東涯・徂徠についてのみみてきたが、俚語をもって字義を解釈する方法は、後に富士谷成章（一七三八―一七七九）が「かざし」「あゆひ」に詳細な口語訳をつけた学問の方法と軌を一にするものであり、また、和歌との関係においてみる考え方は成章の兄皆川淇園（一七三四―一八〇七）の『助字詳解』にみられる『古今和歌集』などを用いての解釈に何らかの示唆を与えたであろう。

（注14）わが国のことばを漢文のそれに例えたものに「和歌手爾葉者唐土之置字也。」というのが『手爾葉大概抄』（室町初期以前に成立）にある。

（注15）徂徠は「助語ハ文ノ関鍵ナリ、実語ヲ引マハスモノナリ。」（『訓訳示蒙』巻一）と述べている。

（注16）東涯も『操觚字訣』（巻之三）の「最・尤」の項などで、和歌の詞を用いて解説を行っている。

本文中に記さなかった参考文献

足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』
中田祝夫『古点本の国語学的研究・総論篇』
小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』

（なお、貞斎には、享保二年〈一七一七〉刊『重訂冠解助語辞』があるが触れなかった。また、引用文の表記は、必ずしも引用原拠の表現のままではない。）